

街を行く

第21回 岐阜 Gifu

信長はどう思っているのでしょうか

久しぶりの岐阜です。以前よりもさらに街の元気がなくなってきています。いつものことですが、地方大都市(ここでは名古屋)近隣の都市に成長戦略を見出すのは簡単なことではないですね。ましてや大阪へも近いわけですから、これらのトレンドを追っていても、勝ち目はない。では、岐阜の街の「らしさ」を出していくには、どうすればよいのでしょうか。

歴史的に考えて、信長は何故この地を重要視したのか。生まれが愛知だから？ それはそうでしょうが、時の都、京に上るには、かけがえのない地理的要因があったのです。戦国の大名は近隣諸国の敵から如何に領地を守るか、如何に敵の領地をすり抜け京に上るか…。今と違って、恐ろしいまでの緊張感から国づくり・街づくりを行っていたのです。ああ、耳が痛いですね！ 戦国の世に思いを馳せると、どうにもわれわれには、緊張感が足りませんよね(自分への戒め)。

緩みがちな緊張感を振り絞り、街を見ると——、駅前商店街は(今や地方どこでもそうですが)“シャッター街”になっていました。そのなかで、かつてこの街の産業は繊維だったのだなあ、と思わせる衣料品店が軒を連ねています。数人の方に話をうかがうと、以前の賑やかさと今とを比べながら、その寂しさを語ってくれました。「この産業は、日本ではもう駄目なのですよ…」。諦めたつぶやきが、当日の雨という天候も手伝って一層寂しさが増し、余計にこの言葉が身に沁みだ。でも不謹慎ではありますが、このシャッター街には何故か“趣”があるのです。何故これがいけないのだ？



岐阜城の天守閣から眺めた長良川と濃尾平野。信長は、いまの岐阜の街をみて何を思うか——。

これはこれで街の顔でも良いじゃないか？ 繁栄して賑やかなだけが街の顔じゃないだろうに。……と、わけのわからない気分になったのですが、それほどに矢鱈と心地がよいのです。それはなぜかと考えながら歩いていると、解りました！ そうだ、この街の持っているもの、それは「癒し」なんです。意外と信長もそこが気に入っていたのかも(…多分違うでしょう)。

そんな思索の道すがら、お腹もすいてきたので、食堂を探してもう少しづらついていると、創業から60余年という渋い建物のラーメン屋、否、“中華そば屋”に出くわしました。さては老舗だなと暖簾をくぐると、なんと満席。しかもメニューは二つ、中華そばとワンタンのみ。それぞれ400円とワンコインでお釣りがくるのですから驚きです。スープのダシの色は濃いですが、口当たりさっぱりとして美味しかった。隠れた名物に出会うと嬉しくなります。あと、岐阜名物といえば金華山に登るのも

忘れてはなりません。岐阜城の天守閣から眺めた長良川と濃尾平野、何故か信長になった気分でした。気分だけでは街づくりができないことは重々承知していますが、どうしたらよいのか。われわれも真剣に考えないと国が減びますよね。

南 一 弘



1982年大学卒業後、三井不動産販売に入社。ローンスター・ジャパン・アクイジションズを経て、2001年エートス・ジャパン・エルエルシーを設立。同代表に就任。2005年4月MID都市開発(旧松下興産)の代表取締役役に就任。2006年株式会社ジャパン・アセット・アドバイザーズを設立。同代表取締役役に就任。

BLOG「南一弘の負けない不動産投資」
http://blog.livedoor.jp/minami_kazuhiro